

# 歴史街道



巻頭グラビア  
**中井貴一**  
ドラマ「雲霧仁左衛門」主演

## 特集1 軍師たちの関ヶ原

直江兼続 / 黒田如水 / 本多正信 / 島左近 / 明石掃部 / 安国寺惠瓊 / 鍋島直茂

## 特集2 松浦武四郎 北海道の名付け親

大型特別企画

### 松平春嶽

福井から見た  
幕末維新



**10** October 2018  
 平成30年9月6日発行  
 (毎月1週6日発行)  
 通巻第368号 昭和63年6月14日  
 第三種郵便物認可  
**PHP** 定価680円

# トラベラーとして、 学者として、 そして人間として……

明治二年（一八六九）、蝦夷地と呼ばれていた北の大地は、開拓使の設置に伴い、名称の変更が検討される。その結果、同年八月十五日、この地は「北海道」と名付けられた。なぜ「北海道」だったのか。そこには、ひとりの探検家の想いが込められていた――。

Yamachi Masayuki

## 山内昌之

●歴史学者●

**PROFILE** 昭和二十二年（一九四七）、札幌市生まれ。カイロ大学客員助教授、ハーバード大学客員研究員、東京大学大学院教授などを経て、現在、東京大学名誉教授、武蔵野大学特任教授。平成十八年（二〇〇六）、紫綬褒章を受章。「幕末維新に学ぶ現在」「リーダーシップ 胆力と大局観」「歴史とは何か」「中東複合危機から第三次世界大戦へ」など著書多数。近著に「歴史家の展覧鏡」「民族と国家」「大日本史」共著がある。

松浦武四郎という人物をご存知でしょうか。幕末から明治に生き、た旅行家であり、いまから百五十年前、蝦夷地と呼ばれていた北の大地に「北海道」と名付けた人物

でもありません。「北海道を開拓した」といった意味では、伊能忠敬や間宮林蔵なども先覚者として挙げられます。彼らが測量に従事しながら蝦夷地の

実態を明らかにした一方、松浦武四郎の特筆すべき点は、彼がアイヌ民族の文化や生活に密接に関わり、寄り添ったことでしょう。私は、そんな武四郎を語るうえで、「三つの顔」に着目する必要があります。と考えると、

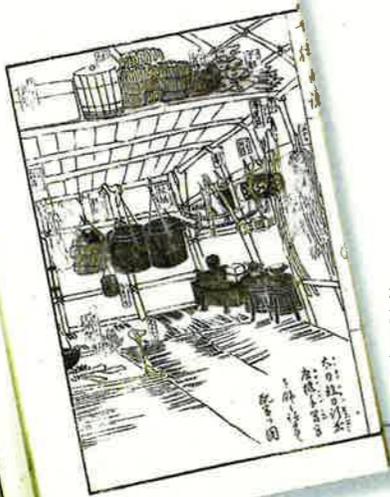
### フラットな視点をもつ記録者

文化十五年（一八一八）、松浦

武四郎は伊勢国一志郡須川村（現在の三重県松阪市小野江町）で生まれました。彼の父は庄屋を務めていましたから、土地の有力者といえるでしょう。寺での手習いの後、十三歳から三年間、津藩の漢学者・平松榮齋のもとで勉強できたのは、彼が恵まれた環境に置かれていたことを物語ります。武四郎は生まれ育った郷土の外

に興味をもち、唐・天然にまでその関心領域は広がりました。そして、親の反対を押し切り、十六歳から日本各地を訪ねてまわります。その間に一度、出家するのです

松浦武四郎著「十勝日誌」より。アイヌの住居「チセ」の内部を細かく記録している（松浦武四郎記念館蔵）



が、弘化元年（一八四四）に還俗し、蝦夷地へ向かいました。当時、日本の北方地域にはしばしばロシア船が出没していました。「ロシアが蝦夷地を狙っているらしい」。そんな噂を聞いた武四郎は、我が国の北辺の安全保障を強く意識したのです。弘化二年（一八四五）に初めて蝦夷地に渡ってから、十三年間で

六度にわたる蝦夷地調査を敢行。その範囲は、樺太や択捉島にまで及びました。そのため、武四郎は「探検家」とも称されますが、

私は彼には「トラベラー」という肩書が相応しいと捉えています。トラベラーというと「旅行者」と普通は考えますが、武四郎の場合は「記録者」という側面を備えていた。しかも、その記録者としての意味で、きわめ

て優れた男でした。たとえば、『近世蝦夷人物誌』。この本を読めば、記録者としての確かさが見て取れるはずです。読み進めていくと、勇者、視覚障害者、彫り物師等々、さまざまアイヌ民族の人士が登場します。が、彼らのプロフィールが詳細かつ端的に描かれており、じつに素晴らしい。その人間がどこでどういう生活をして、どのように働いていたかに触れながら「人」を描いており、表現力は抜群です。また、アイヌ民族が基本的に「善意」と「やさしさ」で人に接しようとする姿や、和人のように儒学を学んだわけではないのに、親孝行、あるいは人に対する慈しみ、他人に対する親切心といった道徳観をもっていることに目を向け、率直な感動を記しています。なぜ、それほどの表現力があつたのか。それは武四郎がアイヌの人びとと、決して上からの目線ではなく、「アイヌだから」「和人だから」と意識せずにつきあつてい

### アイヌ民族を尊重したヒューマニスト

松浦武四郎の二つめの顔は、ヒューマニストとしての側面です。彼は、アイヌの人たちが受けた差別や非道な仕打ちを、自らの著書において批判しました。その姿は今日のわれわれの胸を打つ普遍的な姿勢であり、日本人の良心として語り継がれるべきものだと思います。

北海道小平町にある「松浦武四郎翁の銅像」。右手に筆を、左手に野帳と矢立を持ち、アイヌ民族の文様を施した上着を着用している（写真：山梨勝弘/アフロ）



これはアイヌ民族が、集団として再生産する力がなくなってきたことを意味します。その原因の一つとして、先述した梅毒に加え、疱瘡などの疫病により、免疫のないアイヌの人たち

アイヌ民族にとつての深刻な問題は人口の減少でした。アイヌ民族はもとも人口が少なく、江戸期は二万人から四万人くらいしかいなかったと見られています。武四郎の記録によると、文化四年(一八〇七)に二万六千二百五十六人だったアイヌ民族の人口は、四十七年後に一万七千八百八十人と、約三〇%も減少しています。

地域によってはほとんど壊滅的なところもあり、たとえば東蝦夷地の厚岸は文化六年(一八〇九)の百七十七軒、八百七十四人が、安政三年(一八五六)には五十三軒、二百七十七人と、約七五%の人口が失われています(ブレット・ウォーカー「蝦夷地の征服」第七章より)。

何らかもブルドーザーで国土を「改造」していった一九六〇年代の高度成長期のように、明治新政府は北海道の開拓を推進します。

アイヌの若い男たちも、強制的に連れていかれた場所で悪い病気がうつたりしています。いわば、男女ともに、生殖が不可能な状況になっていました。このようなアイヌ民族の置かれた状況を、武四郎は怒りを込めて書いています。

病気だけではありません。結婚する頃になると、アイヌ民族の男たちはいろいろな場所に追いやられて、昼夜の別なく酷使されています。したがって、生涯、結婚できない男たちも多かったのです。また、暴力と利権によって、和人がアイヌ民族の人妻を奪ったり、結婚適齢期の女性を我が物にして、適齢期の若者たちに結婚相手がいなくなったことも無視できません。

が命を落としたことが大きい。病気だけではありません。結婚する頃になると、アイヌ民族の男たちはいろいろな場所に追いやられて、昼夜の別なく酷使されています。したがって、生涯、結婚できない男たちも多かったのです。また、暴力と利権によって、和人がアイヌ民族の人妻を奪ったり、結婚適齢期の女性を我が物にして、適齢期の若者たちに結婚相手がいなくなったことも無視できません。



北海道釧路市にある松浦武四郎の漢詩碑。武四郎は安政五年(1858)にこの地を訪れた(写真:坂本照/アフロ)

局、商人に委ねられました。こうして場所請負制に変質したシステムは、間に入った者が上納する以上のものを稼ごうとするのが常で、生産性や労働者の能力等を無視した収奪が行なわれてしまいがちです。しかも、伝説にもなっていますが、商人たちが十尾の鮭を数えるときに、「はじめに」といって一尾とつてから、一、二と数えはじめ、十の後に「おしまい」といって一尾とり、計十二尾を奪うという詐欺的行為も横行したといいます。これは日本人として恥すべき行為でした。

てアイヌ民族の男を遠くに連れていき、番人や通詞といった下級役人が既婚者と未婚者を問わず女性に狼藉を働いたことです。たとえば、クスリ(釧路)では安政年間に和人の番人が四十一人いて、そのうちの三十六人が、アイヌ民族の夫をアツケシ(厚岸)に行かせ、その妻を妾にしていると、武四郎は指摘しています。

最後に、ヒューマニストとしての松浦武四郎と重なる部分がありますが、「エコロジスト」という三つめの顔を挙げておきましょう。武四郎は安政二年(一八五五)、幕府の蝦夷山川地理取調御用御雇となり、蝦夷地を歩きまわりました。明治新政府ができると、蝦夷地開拓御用掛を経て、長官、次官に次ぐ開拓判官に抜擢されます。その意味では行政官でもありません。ただし、「アイヌモシリ」(アイヌの大地)の生態系を尊び、それによってアイヌ民族の生活を守るうとした行政官でした。いわば「生態論的行政官」とでも呼べるでしょうか。エコロジの視点からすると、

安政六年(1859)に刊行された『蝦夷漫画』より、樹皮を剥ぐ図。アイヌへの理解促進を目的に、わかりやすく絵で構成している(松浦武四郎記念館蔵)



しかし、生態系は破壊されてしまふのです。武四郎は調査の中で、アイヌ民族の暮らしの変化とともに、北の地に生息する動物や植物にも影響が出ていることに、大きな憂いを感じていました。やがて彼は開拓判官として政府の方針に異を唱えましたが、上司である開拓長官・東久世通禧と対立。結果、明治三年(一八七〇)、開拓判官を辞めて野に下りました。辞職とともに「従五位」の地位も返上した武四郎ですが、彼はその後、蝦夷地とアイヌ民族に関する著書を出し続けます。アイヌと和人が共存しながら、ともに安心して暮らせる。武四郎